

ウラギンシジミの越冬

近藤伸一

ウラギンシジミはネパール付近から中国大陸、インド南部、インドシナ、台湾など広く東アジアの照葉樹林帯を主な生息地とし、福島県付近が生息地の北限となっている。冬季は常緑広葉樹の葉の裏で成虫越冬することが知られている。

昨年暮れに、自宅(神戸市西区)の生垣でウラギンシジミが越冬しているのを、生垣を剪定していた家人が見つけた。このウラギンシジミはアラカシの葉の茂みの奥で越冬していたのだが、外側の葉を刈り取られたために、まともに風雨にさらされる状態になっていた。翅を摘んで軽く引っ張ったが、葉から離れなかったようで、かなりしっかりとしがみついていたようである。

越冬の様子は、地上1.5mの高さにあるアラカシの葉の裏に、頭部を北東方向に向けて、触角を閉じた翅の間に挟みこみ、前脚は折りたたんで4本の脚(中、後脚)でぶら下がるように張り付いていた。

写真を何回か撮って気付いたのだが、アラカシの葉は風で常時小刻みに揺れており、シャッターチャンスは意外と少ない。ということは広い面積の翅が常に風圧を受けているわけで、大きな翅を小さな4本の脚で長期間支えられているものと感心させられる。その後特に十分な観察せず出勤時にチラリと見る程度であった。

今年の1月末から2月2日にかけてこの冬最大の寒波に襲われ県北部は大雪となった。神戸でも気温は-2.3℃まで下がり冷たい風が吹き荒れたがウラギンシジミは同じ体勢で耐えた。

2月3日は寒波が去り暖かい日となった。日光が射し始めた午前10時過ぎ、ウラギンシジミが盛んに口吻を動かしているのに気づいた。これまでずっと折りたたんでいた前脚を伸ばして6本の脚で体を支え、口吻の先は葉面(葉裏)をなめるように前後左右移動させ、遂には口吻先は葉表までに

達し、葉表の端をまさぐり、また葉裏に戻り……という行動を約1時間繰り返した(当日の10時の気温は直射日光下で12℃)。

翌日(4日)も暖かい日であったが、ウラギンシジミは前脚を折りたたんだいつもの4本脚で、口吻を伸ばすこともなく、その後11日までは朝晩2回(8時前と23時前後)の観察だったが4本脚の普段の越冬体勢であった。

2月12日、8時に見た時は普段の4本脚だったのに13時に見ると右前脚を伸ばして葉を掴み5本脚となっていたので観察を始めた。30分後も同じ体勢、14時には右前脚は葉から離れていたが伸びた状態で、その後15時30分まで同じ体勢であった。

17時30分には伸びていた右前脚が90度に折り曲げられ、21時でも同じ状態であった(天候は曇り無風、気温は13時:12℃、14~16時:10℃、21時:6℃)。

翌13日の7時には両前脚をしっかりと折りたたみ、普段の4本脚状態に戻っているのを確認したが、14日の朝姿が無くなっていた。

ウラギンシジミが消えた2月13~14日は昼間汗ばむほどの季節外れの暖かさで、13日には夜(22時)でも12℃あった、その後しばらく温暖な日が続いたが、2月17日には寒さが戻り、当地でこの冬初めての積雪を見た。ウラギンシジミは自発的に葉から離れたのか、力尽きて吹き飛ばされたのかは不明だが、どこか別の場所で無事越冬したものと思いたい。

(KONDO SHINICHI 神戸市西区岩岡町岩岡619-57)

イシガケチョウの採集報告

山口福男

編集子の要望に応じ私の採集記録を報告する。

10・12・1989 1♀ 神戸市中央区諏訪山公園

このことについては本誌第23巻第1号25ページに報告した。採集した日は穏やかな晴天の10時頃

で気温は15度以上あったと思う。越冬前の新鮮な個体で、飛翔はとても緩やかであり、よほど近接しない限り飛び立たず、逃げてみてもすぐ近くに静止した。標本は私が保存している。当時撮影した写真はインセクトリウムVOL28, No.1(1991)の表紙に掲載されている。

4・6・1995 1♂ 神戸市中央区諏訪山公園

前回と全く同じ場所で新鮮な雄、当日は晴天で飛来した時刻は12時、気温は25度を超過しており活動が活発でネットするのがようやくであった。標本は私が保存。なお諏訪山公園にはイヌビワが豊富にあるので幼虫の調査を数回試みたが発見できなかった。

(YAMAGUCHI FUKUO 神戸市須磨区神ノ谷3丁目6-4)

アオドウガネの食草についての

報告(統報その5)

新家 勝

アオドウガネも雑多な植物の葉や花を食べるので、興味を持ち、これまでに12種の食草を本誌で報告したが、今年(1995年8~9月)は、宝塚市光明町の自宅でタニウツギの葉を食べていたのと宝塚市美幸町でトウネズミモチの葉を食べていたのを目撃したので報告する。

(NIINOMI MASARU 宝塚市光明町8番57号)

ヒロヘリアオイラガ幼虫の

食樹についての報告

新家 勝

ヒロヘリアオイラガが阪神間で大発生して話題になったのは、1984年頃だったと記憶する。日本産蛾類大図鑑(講談社 20, Sept. 1982)には、「従来、鹿児島市内だけで採集されていたものが、1979年ごろから大阪や西宮の市街地および北九州

で急に発生したもので、東海地方まで北上している」とあり、「幼虫は、サクラその他いろいろな樹木の葉を食べており、海外では昔からかなりの雑食性であることが知られていた」と記されている。1984年に宝塚市美座二丁目の自宅でも発生し、これまでからいるアオイラガの食べるヤナギ類やカキなどではなく、ツバキ、エノキ、ハナスオウの葉を食べていた。雑食性と聞いていたので、食樹の種類を調べてみようと思ったが、その後、自宅での発生はなくそのままになっていた。今年(1995年8~10月)、宝塚市光明町の自宅とその付近で、多数発生し、サクラ、ボケ、イロハモミジ、ナラガシワ、アベリア、タニウツギ、ヤマボウシ、カキの葉を食べているのを目撃した。

限られた地域での観察結果であるが、前記11種の植物が食樹となったことを報告する。また、今後とも注意して観察し、さらに多くの食樹を確かめたい。

(NIINOMI MASARU 宝塚市光明町8番57号)

ホシミスジの分布拡大例

永幡嘉之

ホシミスジ *Neptis pryeri* は、兵庫県南部において比較的近年に分布を拡大した種としてよく知られている。都市部やその周辺では、庭木としてよく利用されるユキヤナギ、シジミバナ、コデマリなどを食樹としている。本種が、本来分布していなかった小さな谷間に分布を広げる様子を実際に観察したので報告する。

観察したのは兵庫県三木市大村である。このの蝶相については過去に筆者が報告したことがあるが、長さ2kmほどの浅く小さな谷の奥に、金剛寺というお寺がある(1)。そこには多くのユキヤナギやシモツケが食栽されているにもかかわらず、1984年から1990年まで7年間住んでいた間に、本種を目撃したことは一度もなかった。この谷の入